

学校文化への適応（2）

—仲間関係の形成と親から見た心理的变化—

清水 由紀

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

問題

小学校に入学した児童は、様々な側面において、学校文化に適応していかなければならない。清水(1998, 教心)では、入学直後とその3ヵ月後に、朝の会という公的な集団場面の中で教師の指導がどのように行われているかを分析し、社会的側面における適応について検討した。本研究では、同時期の同クラスを調査対象とし、児童同士の仲間関係や親から見た児童の内的変化といった、対人的・心理的側面における適応という観点から、学校文化への適応を検討していく。

調査の対象としたのは、児童の約半数が同じ敷地内の幼稚園出身で、残りの半数がその他の幼稚園出身という構成となっている、小学校1年生の1クラスである。近年、幼稚園・小学校の連携の重要性が指摘されているが、関連する要因として、同じ敷地内の幼稚園への通園経験や入学時の顔見知りの数が考えられるだろうか。調査1では児童の仲間関係の形成について、調査2では親から見た子どもの心理的变化について調べ、出身幼稚園の比較を行う。

方法

調査1 調査対象 東京都内の国立大学附属小学校1年生の1クラスの児童40名(男女は半々)。同大学附属幼稚園からの入学者(「附幼」と略記)が22名、その他の幼稚園からの入学者(「他幼」と略記)が18名という内訳である。**調査時期** 第1期は4月、第2期は7月。**手続き** クラスの児童全員の顔写真を貼り、その横に各児童の名前を書いたものを見せ、休み時間・勉強時・造形時のそれぞれで一緒に行動したいと思う児童を無制限に選択してもらった。

調査2 調査対象 調査1の児童の保護者40名。**調査時期** 7月中旬に保護者にアンケートを配布し、約1週間後回収した。4月のことについては思い出して回答してもらった。回収率は100%。**質問紙** 次の4点について尋ねた。①小学校入学時の戸惑いの大きさ(7件法評定)、また戸惑いを感じた点(複数選択)、②教師・仲間に馴染んだ時期(選択)、③学校の話をする頻度(7件法評定)、④学校の話の内容(各内容が何%を占めるかを回答)。③・④については4月と7月について尋ねた。

結果と考察

データの性質に応じて、性別(2)×出身幼稚園(2)

×時期(2)の3要因分散分析(時期の要因がない場合は2要因)、あるいは χ^2 検定を行った。

<全体的な変化>

調査1 選択した仲間の数 7月になると増加した。**相互選択数** 7月になるとお互い仲間だと認知し合える人数が増えた。

調査2 入学時の戸惑い 男子の方が大きかった。**入学時に戸惑いを感じた点** 全体的に「通学」「友人関係」が多かった。**教師・仲間に馴染んだ時期** 男子よりも女子の方が早く、5月までに馴染んだと回答した。**学校の話をする頻度** 7月の方が高かった。**学校の話の内容** 4月・7月とも「仲間」「担任教師」が多かった。「通学」は7月には減少し「勉強」「朝のスピーチ」といった学校活動は増加した。

<出身幼稚園による違いが見られた点>

調査1 附幼選択率 入学直後女子附幼のみが出身幼稚園が同じ者を仲間として選びやすかったが、7月にはこの傾向が消失した。

調査2 入学時の戸惑い 附幼男子は他の群よりも、戸惑いを感じたと回答した人数が「担任教師」「規則」は多く、「通学」は少なかった。他幼の中には「規則」に戸惑いを感じたと回答した者はいなかった。**学校の話の内容** 「違うクラスの仲間の話」は附幼のみ7月の方が少なく、「通学の話」は4月・7月とも他幼の方が多かった。「朝のスピーチ」は、4月・7月とも附幼の方が多かった。これは、自発的に前でスピーチをする人数が附幼の方が多いということを反映していると考えられる。

まとめ

清水(1998)における教師の指導の様子と対応して、対人的・心理的側面における適応は7月までに進んでいることが示唆された。

出身幼稚園による違いは、通学に対する戸惑いや同幼稚園出身者の仲間選択などにおいて入学時には見られたものの、3ヵ月後には見られなくなった。その他、担任教師や規則といった「厳しさ」という面においては他幼の方が戸惑いは少ないが、自発的に発言するなどの面においては附幼のほうが得意である、といった違いが見られた。これらは、経験した保育形態(自由保育、一斉保育など)を反映している可能性が考えられる。今後、この点についても検討する必要がある。